

市場分断と信用金庫の効率性 —合併は効率性向上に寄与したのか—

武蔵大学 茶野 努
武蔵大学大学院生 渡辺 禄朗
武蔵大学大学院生 鈴木 三郎

1990年代後半から2000年代初頭に信用金庫の合併が相次ぎ、1990年3月に454あった信用金庫数は2009年3月末には279までに減少した。このような状況下でも、中小企業向け貸出における残高は一定水準に保たれるなど、信用金庫は地域経済で一定の役割を果たしてきたとされる。一方で、預貸率の低下、貸出先における製造業や卸・小売業向け貸出の減少など地域金融機関としての機能低下を指摘する声もある。

われわれの関心は、劇的な環境変化のなかで行われた合併等が効率性の向上に資したのかどうかである。井上(2003)によれば、信用金庫の合併効果を経費率や総資産利益率の推移で検証し、人件費などでは経費削減効果が見られるものの、それが総資産利益率等の収益性の向上に結びつくかは不明であり、合併後に経費効率が平均的水準に回復するのに数年かかるという。また、坂井他(2009)は合併前後のROA・経費率やX非効率性、自己資本比率の変数を比較し、合併が平均的には収益性を改善するものの、効率性や健全性を悪化させるとしている。播磨谷(2004)はDEAおよび確率フロンティアモデルを使って信用金庫の効率性を分析し、合併直後の信用金庫の費用効率性が低いとの結果を得ている。このように信用金庫の合併は、必ずしも効率性の向上に直結していないようである。

本論の特徴の一つは、確率的フロンティアモデルによるMalmquist指数の計測を通して、信用金庫の効率性変化を明らかにし、信用金庫の合併の有無とMalmquist指数の大小を比較することで合併効果を検証している点にある。その際、われわれは、信用金庫がその営業基盤を置く地域特性に着目し、その地域が東京や神奈川のような競争的と思われる市場と分断されているのかどうかを重視した。地域貸出市場に関する先行研究には、Kano and Tsutsui(2003)等々があるが、われわれは2001年度から2008年度という長い期間について、市場分断の有無を追加検証しているのが第二の特徴といえる。

市場分断と合併の有無により、信用金庫を四グループに分けて、その効率性変化の差異を多重分析した結果は以下の通りである。東京・神奈川のように競争が激しいと推察される市場にある信用金庫のほうが、東京・神奈川とは市場が分断されている東北・九州・沖縄のような地域にある信用金庫よりも、2001年度から2008年度にかけての効率性の向上が著しい。これは、DEAによるMalmquist指数を計測した堀江(2010)ともおおむね整合的であり、市場構造・成果仮説が教えるように、競争が活発な市場ではより望ましい市場成果を得られることを示している。一方、市場が分断されているかいないかをコントロール変数として合併効果をみると、合併を行った信用金庫のほうが、効率性の向上が有意に優れているという事実が見いだせなかった。